

春日部福音自由教会 2020年9月6日 11:00 中央会堂礼拝(同時配信)

聖書 新約聖書 第二テモテ 3章 1節～9節

説教 「終わりの時期の見張り人」高橋敏夫牧師

I. 序

今朝は『終わりの時期の見張り人』という説教題で、第二テモテ 3章 1節から 9節を解き明かしたいと願っております。

本当に日本だけでなく、ニュースを読んだり聞いたりしていると、世界中が騒がしいですね。この感染症・新型コロナウイルスは、いつ止むのかなーってということは本当に気を病みます。そして私たちの国政が揺れ動いていて、日本の政治はどこに向いて行くんだろうかという思いも、このところ私の心の中には強く強く働いています。そして何よりも敗戦 75 年経って、日本と米国との関係がどうなっていくんだろうか、という思いが強いです。米国の教会～私たちを支えてきてくれた教会～は、「本当に米国にキリストの影響を与えているのだろうか」という思いは強くあります。まして私達、弱小である日本の教会は、同胞に対してどのような影響力を与え、感化力を与えているのか、と言うと、虚しいほど不安になります。であるにもかかわらず、私は今のこの騒がしい世の中が、み父の憐れみと、御子の贖いと、聖霊なる神様の、優しいとりなしの中に守られているということを信じて、安んずる信仰にいつも戻されていることは感謝です。今朝も礼拝者として、そういう思いでみことばを語らせて頂いております。

II. 終わりの日は来る

一節の冒頭、「終わりの日に」というこの概念は、旧約聖書の時代からありますけれども、特にイエス様が弟子を訓練される時に、中心的な、イエス様の神学なんてないんですけれども、いつも「“終わりの時”を意識する」、そういう教育をされていたようですね。だから、使徒の働き、パウロ書簡、他のヨハネとかペテロとか、特に黙示録に至ったら、もうその頂点になるわけですが、”終わりの日”ということについて聖書は、非常に新鮮に、読む者がドキッとするような教えがそこに含まれております。そういうことを踏まえて、この第二テモテの 3章 1節の「終わりの日には困難な時代が来ることを承知していなさい」という書き始めですね。だから素直に読むと、どんな時代であっても、教会は、困難な時代に対してよ

くよくよく備えていなくてははいけません、ということになります。だから今のようなこういう礼拝の仕方もそのひとつでしょうね。そういう中でここでのテーマは何かと言うと“偽教師”です。「偽牧師、偽指導者には警戒しなさい」という弟子テモテに対するパウロの教えがここに込められております。だからこのパウロにしても、テモテにしても、牧会者としての意識は、この時代、この世の見張り人、すなわち、この世の中どう動いているか、身近に言えば、私たちの春日部がですね、どういう風に動いてきて、どのような人たちによって指導され、どのような方向に向かおうとしているのか、ということに関して、いつも見張っていないといけない。この見張り人ということは、旧約聖書にある言葉で、“預言者”を意味したり、あるいはその時その時の“指導者”とか、一般的な、本当に祈り礼拝している者たちを象徴する言葉として“見張り人”という言葉が使われております。だからパウロは、パウロ自身が獄中にありながら、その時代の“見張り人”として、神様の御前にある。だから、神の心、神の眼、神様の感じるところを感じとして受けとめて生活している人、そういう人が求められているということですね。

これは僕達がこういうところ読む時に、本当に心動かされて読む者になりたいと思うんですけども、天と地を創造された方が、この世、私達のこの天と地が失せる、消え失せる、その終わらせる日を定めておられる、とまでイエス様はおっしゃっておられます。憐れみ深いみ父が、終わりの日をもうすでに定めておられるという危機感を持って、私たちは、礼拝者として今朝そこに座っていますか。だから奉仕に関しては、主のみ前にあるという臨在感と、神様によって退けられないための緊張感が必要です。だから一番聖書が忌み嫌うのは、だらだらと慣れっこになって奉仕している人です。それを“パリサイ人、偽善者”とイエス様は断定されたのですね。本当に私は不思議に思うんですよ。憐れみ深い神様が、終わりの日、この天と地とを消し去る日を定めておられるというイエス様の御教えです。これをね、脅しで使うメーターの上がった教会があります。これは駄目です。主の日、裁きの日、主がおいでになる日について、自分自身の毎日、茶碗洗ったり、ごはんを用意したりする、洗濯をしたりする、ふき掃除をしたりする、当たり前なことはきちんとできていての、終わりの日です。主の日です。そのバランスの崩れたやつは、聖書を信じている、本当に聖書を信じている者とは認めていないんですよ。これは今の時代、これから気をつけなければならないことです。だから脅すために、終わりの日とか裁きの日とか、死について論じているわけではないんですね。

また私たちは、こういう短いパウロの言葉が、現代知識人の、その主張、哲学、思想、生き方を否定しているということに気づかなければなりません。

物質的な世界、今の科学で証明できる方程式に描けるような（唯物的ダーウィン進化論説と私は言いたいのですが）そういうことが真理であるかのように、私たちに毎日のように届いています。皆さんはどこに行こうかって言っても、いや行かない方がいいねっていうブレーキが効いてる。テレビの討論番組みたいなものをご覧になったと思うんですよ。そこで視聴されてる、ほとんどは唯物的ダーウィン進化論説に基づく主張です。これはもう、幼稚園から敬老の集いまで毒されていると思いますよ。

21世紀に人気のある知識人のほとんどは進化説を取っています。そして進化変化する中で、この世界はずっと続いていく。形は変わっても。だからね、最近では死についての観念も、そういう人たちによって違った情報が入ってくるのですね。

「あなたが死んでも、別に他の DNA にうつつて、ちゃんとなんとかなってくんだから、あんたは心配することないんだ」。楽観主義ですよ。だから私たちが聖書を通して教えられている「死後裁きがある」ということは、全く全く完全に信じられていません。むしろ否定されています。私たちは、こうして礼拝する者たちは、笑いものです。だから、彼らの高慢チキな論争の中で出てくるのは、「そんな神学的な言い方はやめろよ」という言葉です。私は本当に虚しく思います。でも聖書が教えているのは、突然、その日は、突然、終わりの日は来る。そのために礼拝の備えをしていなければならないのです。だから、何を飲むにも食べるのにも、何をするにも神様を意識した生活、これを臨在宗教というか臨在教育って言葉好きなんですよ。神様をいつも身近に覚えて生活している。だから一番悪いのは、この礼拝しているあなたと、礼拝終わって外に出たあなたが、バラバラになってたらもう情けないでしょ。だからずっと、イエス様の教えを心に抱く者たちは、今の世が突然消えるということ、聖書は、イエス様は教えておられるということです。パウロはそのことを常に意識していますね。そういうわけですから、私たちは自分の感情メーターを上げることなく、冷静に、終わりの日についての生き方、その終わり方の備えを学習していなければならないわけです。

ここまで通じましたか。だからどんなに魅力的に僕たちの周りに情報が飛び交ったとしても、聖書は明確に語っていますよね。「それは消え去る」。でも意外とキ

リスト者も、流行に乗せられてますよ。そしてそれは教会の指導者だったら、その人の話を聞く人たちに悪い影響を与えています。なぜなら私達も時代の子、流行の子ですから。イエス様は、世が終わる時のしるしとして、これは弟子たちが聞いた質問に対して答えているんですけども、「人に騙されないように気をつけなさい、偽預言者が大勢現れて多くの人を惑わします」とおっしゃいました。だから聖書を読み祈り、そしてこうして礼拝をささげている者として、イエス様の言葉を新鮮にいつも心に留めていきたいですね。

Ⅲ. 偽教師の結ぶ実その1・自分だけ 金だけを愛する

非常にリアルに、この第二テモテの3章ではテモテに対して、「テモテ、お前が牧会するエペソの教会の中に、そうした偽教師が侵入しているよね、そのために君は苦勞して、戦って、説教もしているよね」っていうことを、ここで語ってるわけですね。でね、私この同じ箇所から、三つの新しい説教作ってんですよ。偽教師の結ぶ悪の20項目があるんです。あるところでは、その20項目をひとりひとりひとり読み上げて学ぶってことしたんですけども、今日は、この20項目の中の三つの、その悪の実、その偽教師が結んでいる実について申し上げたいと思います。

第1は、その2節にある愛のきよさを否定するというよりも、喪失させているその偽牧師偽教師の、人格です。すなわち結局のところ、その人は自分自身を愛してるんですね。それは言動に現れているではないか、よく言われてきた自己中心の生き方です。結局あれこれしてても結局自分しか愛してない。自分第一。もう一つは「金銭を愛する」ってあるでしょ。カネ、株。これは日本の敗戦とともに、日本国中が汚染された経済万能主義ですよ。全部経済の数字で測られたからね。本当に僕の子供の頃は貧しかった。考えられない。でもイエス様が僕たちに教えておられるみ教えのひとつは、ご自身が愛して自分が弟子として選ばれた中に、銀貨30枚を愛してご自分を売ったユダのことを、すごく印象的に語っておられるんですね。これどういうことですか。私達の中にもそういう人がいるってことですよ。結局おまえ金愛してんじゃないかよって、自分第一主義じゃないかよってということ。それが偽物。本物じゃないということです。敬虔の形をしていても。だからせつかくエジプトから脱出させられて、神様の守りの中にあるイスラエルの民が荒野で、もうどうしようもない民に変化してたんですよ。牛の像作りはじめたりね。そういう中で、秩序を守るために十戒をモーセを通してお与えになった。その柱は皆さんのご存知

のように「神さまを愛すること」でしょ。次に「同じように隣人を愛すること」でしょ。これはイエス様が弟子たちを訓練する時に、彼らはミミダコができるぐらい何回も何回も教えられたことです。すなわち神様を愛してやまない、その謙虚な生き方、信仰、そしてもうひとつは、自分を愛するよう隣人を愛しなさいよという、隣人への敬意、神への敬愛と隣人への敬意。この2本こそが、神様が教えているみ父の中心にあるんです。

弟子たちは繰り返し繰り返し教えられて、僕たちもそうでしょう、ずっとそういうことを聞いてきたわけでしょう？それがちゃんと、今日いただくような聖餐式の、血となり肉となっているかっていうことが、今朝の礼拝で問われてますね。だから聖書が圧倒してる愛という最も大切なゴールに向かって、外れている人。愛、愛と言いながら、実は自分を愛して、金を愛しているっていうね、隠れているんですよ。でも、そういうところをイエス様は見ておられて、「偽善者、パリサイ人、偽物！」と断定される。だから聖書が、その最も大切な神様を愛し、隣人を愛するという愛から外れた生き方をしている人のことを、何て言ったんですか？「罪人」と呼んだんですよ。聖書がいう罪人っていうのは、本当の愛から外れている人のことなんですよ。そういうことをもう一度パウロはテモテと共感しようとしていますね。

IV. 偽教師の結ぶ実その2・教えと生活がバラバラ

第二番目の嫌なことは、4節のところに、「神よりも快樂を愛する者」ってありますよね。これは、偽教師の特徴というのは、教えと生活とがバラバラだ、統合していない、インテグレートしていない、そこにイエスもどきの心が現れたとしても、もどきであって本物ではないということです。これ探られますね。何年イエス様を信じていても。快樂というのは、結局自分自身の欲望が第一になって、その欲望が満たされることを幸せと感じている、そういう折り目正しい罪人です。自分の思いがなってるから幸せだという人です。意外と、良いと思うことであっても、それが本当にイエス様の心でしていなければずれてる場合たくさんありますよ。いろんな奉仕で。良いと思ってやってることでも、ずれていたらダメなんですよ。結局自分の思いがそこで優先してるわけですから。本当に僕は純粹培養で、戦後ね、イエス様に召されて今日まで来てるんですけど、偽物の牧師、偽物のキリスト教徒、いやって言うほど見てきました。みんなそれは消えていきましたね。ほとんど消え去っていきました。だからどんなにうまく繕っていて、キリスト者の生活、牧師ら

しく繕っていても、必ず本心は現れるんですね。そして神様ご自身がその人を裁かれます。だからあなたが裁く必要はないんです。

V. 偽教師の結ぶ実その3・敬虔の力を否定する

5節に気になる言葉があるんですよ。偽教師の結びの。「見せかけは敬虔であっても、敬虔の力を否定するものになります。こういう人を避けなさい」。“敬虔”。よくまあジャーナリストの好きな言葉でね、牧師とか、クリスチャンがなにかすると必ず枕詞で「敬虔なキリスト者」。これどういう意味ですか?“敬虔”。あなた自身が誰かから「あなたは敬虔なクリスチャンですね」って言われて悪い気持ちしないでしょ? どうですか?ここに罠があるんですよ。「敬虔の力」を否定するってことは、イエスキリストと自分の心が一つになっていなくて、イエス様から注がれている力を感じることができなくなっている人間の事です。それをクリスチャンと言うか、牧師と呼ぶか、宣教師と呼ぶかはとにかくとして、敬虔の力を、その生活自身が否定している。形は敬虔でも、日常生活の中にイエス様に従う心がきっちり整理されていない。残念!パウロはそういう人を警戒しなさいよって、テモテに促しているんですね。だからイエス様も、「“主よ、主よ”と言う奴ほど、嫌な奴いないよな」って、弟子たちに言ってるわけです。「あいつらなんだよ、長く祈って。あれ嘘じゃないか」。わざわざ礼拝の場所でそういうこと教えてるときもありましてね、「あの中で誰が一番神様に快くささげものしたと思うか?レプタ2枚をささげたあの人わたしの心を感動させているんだ」。“敬虔”という言葉をもっと短くいうと、礼拝をささげる前後において、私たちはどれだけ真実を以って礼拝者になっているかということが問われてるんです。奉仕することも、祈ることも、オルガンを弾くことも、全部、礼拝者として、神様にささげるささげものとして、そのご奉仕をしているかどうかという、優しさがそこにあるかっていうことです。だからある時から私は「父なる神様の優しさ、御子イエス様の贖い、聖霊なる神様の絶え間ないとりなしの祈り、そして父なる神、御子なる主キリスト、聖霊なる神様に包まれて、今もあるやすらぎへの感謝」を、とつてもとつても意識するようになりました。これは教理的に三位一体っていう言葉では表現できないぐらい、深いものです。こんにちね、神学的な知識とか まあ聖書解釈の本がどんどん今発行されています。それが参考になって教会で語られたりしています。でも聖書が書いて教えていることは「結局のところもう全てが聞かされていることだ、神を畏れよ、神の命令を守れ、これが人間にとってすべてである」。伝道者の書 12章 13節

です。とどめの一発ですよ。これが“敬虔”ということです。「神を畏れ、神の命令を守り抜く」。その生き方こそ“敬虔”という意味です。

VI. 自分自身を吟味する

さて、8節にね、聞きなれない名前が出てくるんですね。これヤンネとヤンブレ。これね、聖書調べても出てこないんです。聖書66巻に出てない名前なんですよ。ただ、有名な『教会史』を書いたオリゲネスという人が、この二人の人物をあげています。初代教父と言われる人ですね。それからユダヤ文学の中で、我々そう呼んでるんですが、モーセに逆らって、悪魔小悪魔に従ったエジプトの知識人として、この二人が挙げられています。だから何でこんなこと言ったかという、当時のこういうことを引用する時に、当時のユダヤ人が常識的に知っている人の名前だったわけです。こんにち教会に来ていない人が、ユダについてよく知ってるのと同じことです。じつはですね、ヤンネとヤンブレは、もうイスラエルが北と南に分かれてた時代に暗躍してたんですよ。で、それをイザヤは、非常に嘆き、エレミヤは泣きながらこの事実を語ってるんです。選ばれた者たちの中に、こういう悪しき者たちがいたということはね、僕たちが今日礼拝者としてささげた中で、自分も大丈夫なのかという問いかけが必要だということです。あなたこそ、このヤンネとヤンブレじゃないのか？と。そういう読み方は大切ですね。

だから、初代教会の中にも、ヤンネとヤンブレが侵入していたんです。ましてや私たちの教会は？と、問われます。教会も教父の時代も信仰の戦いがあった、宗教改革がその最たるものでしたね。その後、今度、国家と教会の争いがずっと続きます。そしてさらに分裂した教会同士の争いが続きます。だから私たちはたえず、自分の内側を探られ、自分自身の信仰が吟味され、この教会自身がいつも聖書から、聖書に基づいて吟味されていなければなりません。信仰の戦いは続いているんです。だから教会が規定したこの66巻の啓示の中から、それが偽ものか本物か、牧師の説教が本物かどうかっていうことが、問われ続けていかなければならないのです。だから今私たちが問われていることは、私たちは私たちの属する春日部福音自由教会が、春日部の街に対してどのような感化力を与えているんだろうかってことが、とっても問われていると思います。9節の「しかし、彼らはこれ以上先に進むことはありません。彼らの愚かさ、あの二人の場合のように、すべての人にはつきり分かるからです」。どんなに悪がはびこって隆盛を極めているようだけど、結

局なくなるよっていうことを言っています。パウロはデモテを励ましています。その愚かさは必ず終わる。終わりが来る。

一か月くらい前にね、私の所に電話がきて、高校時代にイエス様を信じた子が、結婚して孫もいて。で、「高橋さん、いつも僕たちに言っていたのは、いつも聖書読むこと、お祈りすること、集会を休まないこと、証しすること、この四つの原則を大原則としておしえてくださいましたよね。ところがですよ、うちの教会は牧師が教会に来るなって言うんですよ。高橋さん、どうやって責任取るの？教会に行きたくたって行けないんですよ。」今の現状ですね。「キミのところはあれかい、同時配信みたいな電気使って礼拝してないの」って聞いたら、「やっていますよ」、「それでいいじゃないか」って言ったら、その彼女が電話よこしたのは、お姉さんのために、お姉さんに教会を紹介したかったんですよ。でも教会に来ないでって言うから、連れて行くことができないっていうのは彼女の悩みだった。「だったらうちもそういう礼拝もやってるようだけど、そのお姉さんのところに行って、お姉さんと一緒にそこで礼拝できるじゃないか」、「あ、そっか」って言って、後から手紙が来て、「あのあとお姉さんと一緒に、義理のお兄さんも一緒に、同時配信で説教を聞くことができ、まあ良かったと思います」っていうね、手紙がありました。嬉しかったですよ。私がまだ 20 代…バリバリの伝道者の頃の実です。パウロはこう言いました。「私は自分の体を打ち叩いて服従させます。ほかの人に述べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないようにするためです」。明確にパウロは「自分の体を打ち叩いて、そのいい加減さの出る時に、私は今も戦ってるんだ。もう本当にどうしようもないコリントの教会の人々への意識を上げるために、私パウロは自分の体を打ちたたいて従ってるんだよ、偽牧師になりたくないんだ、偽教師になりたくないんだ、偽キリスト者になりたくないんだ」そういうことを訴えています。

VII. 結びの祈り

天の父なる神様、あなたの弟子として、あなたが召してくださった証人として、見張り人として、その使命を全うさせてください。主イエスキリストの御名によって祈ります。アーメン。